

聖書箇所：サムエル記第一 10章 1～13節

説教題：新しい人に変えてくださる神

はじめに

私たちは、ときに人生の中で大きな失敗をして、どん底に突き落とされるような挫折を経験することもあります。そんなとき思います。「もうこんなみじめな自分はいやだ。人にも見られたくない。自分のことを全く知らない、そんなところに行ってしまいたい。いつそのこと、もっと別の人間に生まれ変わるのならば、どんなに幸せだろうか。」

今朝開いているサムエル記 10章 6節で、サムエルはサウルにこう言っています。「あなたは新しい人に変えられます。」

「自分もこんなふうにすぐに変われるのならどんなにすばらしいだろうか。」サウルは一夜にしてイスラエルのヒーローになっていくのです。サウルのことをうらやましく思うかもしれません。しかし、そんなサウルはやがて悲惨な晩年を送ることになってしまうのです。いったいサウルに何が起きたのか。ともに見てまいります。

1 神が立てた王サウル

サウルは、いなくなった雌ロバを捜す旅に若者ひとりと連れて出かけました。しかし、どこを捜しても見つかりません。さあ帰ろうというときに、お付きの若者が提案する。「待ってください。サムエルという有名な人がいます。その人のところに行けば、自分たちが行くべき道を教えてくれるに違いありません。」

ふたりは早速サムエルを尋ねていきます。そうするとサムエルはこんなことをサウル

に言うのです。「雌ロバはもう見つかったから心配しなくてよい。あなたに神のことばを聞かせます。」いったいそれはどういう事か、サムエルはそれ以上説明しないで、いきなりサウルと若者を宴会に招き最も良い席に座らせ、特上の料理で迎えていきます。サウルはとまどいます。

翌朝、サウルに同行してきた若者を先にやらせ、サムエルとサウルのふたりきりとなります。そこではじめてサムエルは事の真相をサウルに明らかにしていきます。

1節。「サムエルは油のつぼを取ってサウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った。「主が、ご自身のものである民の君主としてあなたに油をそそがれたではありませんか。」

昔イスラエルでは、王さまがその地位に就くとき儀式として頭に油をそそいだと言われます。雌ロバを捜していただけの若者が、今やイスラエルの王に立てられました。サムエルが勝手にサウルを選んだのではありません。あらかじめ神がサウルを選んでおかれたのでした。

2 主の霊

(1) 激しく下る

続けてサムエルはサウルに、これから数日のうちに起こることを詳しく告げます。その中で最も不思議なことばが6, 7節ではないでしょうか。「主の霊があなたの上に激しく下ると、あなたも彼らと一しょに預言して、あなたは新しい人に変えられます。このしるしがあなたに起こったら、手当たりしだいに

何でもしなさい。神があなたとともにおられるからです。」

事実、この後サムエルが告げとおりのことが起きていきました。サウルの上に神の霊が激しく下り、彼は預言者の一段に加わって、預言をし始めました。サウルのことをよく知っていた人たちは、サウルのあまりの変わりように驚きます。おそらくうらやましいという気持ちとねたみの気持ちが半分くらいあったのでしょう。「サウルもまた預言者のひとりなのか」ということわざができて、後の人たちに語り継がれるくらい、大きな出来事でした。

(2) 後に主の霊はサウルを離れる (16:13)

ここだけを読めば、サウルはどこかのシンデレラボーイのような恵まれた幸運の持ち主、成功物語に聞こえます。しかし、この後サウルがどうなったのかを知っておく必要があります。主の霊は確かにサウルに下りました。しかし、そのままサウルの生涯にわたって主の霊がサウルとともにあったわけではありません。このときから数年経ったときのことですが、16章13節にこう書かれています「主の霊はサウルを離れ、主からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。」

そのとき以来、サウルの運命は下り坂のように転落していきます。そして最期には、サウルは無謀な戦争に出陣し、そこで死んでいくことになります。

なぜ主の霊はサウルを離れていったのでしょうか。サウルに何が起きたのか見ていきます。

3 サウルへの命令

(1) 七日間待て

サムエルはサウルに言っています。「手当たりしだいになんでもしなさい。」これを読むと、サウルは何でも思うがままに自由奔放にふるまってよいと言われたのかと思ひ込みます。そうではありません。

私たちは、王様と聞くと、何でも自分の思い通りに国を動かす権力者のように私たちは考えます。しかし、サムエルはきちんと釘を刺しています。1節をもう一度読みます。

「主が、ご自身のものである民の君主としてあなたに油をそそがれた。」

イスラエルはどこまでも神御自身の民なのです。決して王様のものになるのではない。神の代理として王様がイスラエルを治めるのですから、勝手気ままに権力を振り回すようなことは許されない。そういう立場にありました。王には王としての節度が求められるのです。

サムエルは、このことに加えてもう一つのことを言っています。8節。「あなたは私よりも先にギルガルに下りなさい。私も全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげるために、あなたのところ下って行きます。あなたは私が着くまで七日間、そこで待たなければなりません。私がなすべきことを教えます。」

イスラエルの王と言えども、サムエルが指示を与えるまで、七日間待たなくてははいけません。サムエルをとおして神の指示に従わなければならない。決して勝手に何でもやってよいと言っているわけではありません。

どこまでもイスラエルの王は、神の民たちをゆだねられて神の代理として治める王に過ぎないのです。そのことをサウルはわきまえる必要がありました。では、サウルはサムエルのことばをどのように受けとめたのか。

(2) しかし、待てなかった

そのことはやがて 13 章 8 節で明らかになっていきます。先取りして言いますが、サウルは七日間待っていないさいという命令に従うことができず、自分勝手に行動してしまいます。

サウルにも同情したくなるような事情がありました。イスラエルの敵であったペリシテ人が軍隊を編成し、今にも襲いかかってくるという大変な事が起きました。サウルも軍隊を整えてはいたのですが、サムエルが来るまでは行動を起こすことができない。七日間待て言われていた。でもなぜかサムエルは遅れてくる。早く戦闘態勢に入らないと、負けてしまう。業を煮やしたサウルは、待ちきれずに行動を起こしてしまふ。

サムエルはそのことを知ったとき、「あなたは何と言うことをしたのか」と言ってサウルの軽率な行動を責めます。そのような経過があって、やがて主の霊はサウルを離れてしまふのです。

ひとことで言えば、サウルは、自分に課せられた責任の重さを理解できなかったということです。神の民をゆだねられ、イスラエルの人々を神に代わって治めさせていただいているという謙遜さを忘れてしまいました。

そもそも、サウルがイスラエルの王に選ばれたのはどうしてだったのか。サウルに何か特別の能力とか、家柄とか、誇るものがあったのか。何もない。何もないのに、サウルが選ばれていく。

本当ならば、サウルはそのことを神に感謝しなければなりません。このような自分なのに選ばれたのだと謙遜になるべきでした。しかし、サウルは神からいただいた大

きな恵みを見失い、高ぶる者となってしまいましたのです。

4 真の王イエス・キリスト

(1) 死に従う王

サウルのことから、イスラエルの真の王となって来られたイエス・キリストのことをもう一度考えさせられます。

この方は、私たちの王という立場で来られたのですから、サムエルが告げたように「手当たりしだいになんでもできる」力と能力を持っておられました。

イエスがユダの裏切りによって、群衆に取り囲まれ逮捕される時のことですが、弟子たちは剣を手にして、応戦しようとした。そのとき、イエスは弟子たちにこう言われるのです。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとでも思うのですか。だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましよう。」

ご自分が逮捕され、裁判にかけられ、十字架で処刑されていくという瀬戸際になっても、イエス・キリストはご自分が持つておられる力をあえて使おうとはなさいませんでした。

ひとえに、父なる神のみこころに従うためです。ご自分はイスラエルの王なのだけれども、その王とは、父なる神の代理としての王に過ぎない。ご自分が治めておられる民たちも、ご自分の民ではない。この人々は、父なる神が愛する特別なひとたちなのだと言いまえておられました。

イエス・キリストは、決して高ぶることはありません。ご自分の力を誇ることもありません。むしろ、私たちが救うためにご自分の持っておられる力をあえて使おうとなさらない。

(2) 待ち続ける王

サムエルがサウルに対して七日間待っていないさいと告げました。敵が目の前に押し寄せてきても、黙って待っていないさい。そういう指示でした。けれども、サウルは目の前の敵が恐ろしくなり、また味方である者たちも、徐々にサウルから心が離れていってしまうことを恐れ、黙っていることができず、待つことができず、自分を守るためにあわてて行動してしまいました。

イエス・キリストの態度はサウルと対照的です。イエスを捉えようと群衆が手に武器を持って押し寄せてきました。けれども、父なる神が特別に助けに出ることはありません。それでも、キリストはひたすら待ち続けます。十字架につけられても、なお助けはありません。この方は、十字架において完全に見捨てられ、十字架において死なれ、墓に葬られてしまいます。やがてご自分が墓からよみがえらせていただくことを信じて、すべてを父なる神にゆだねて行かれました。主は、徹底的に待つお方であることを覚えます。

5 新しい人に変えられる

私たちは、新しい自分になりたいという願いを心のどこかに持っています。しかしまたそんなことは絶対にありえないことだとも思い、あきらめています。

しかし聖書は言います。サウルの上に主の霊が下ったとき、サウルが新しい人に変えら

れたように、私たちは変えられていく。パウロは言います。「あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。」(コロサイ 3:9, 10)

私たちが救い主キリストを主と信じるとき、私たちのうちに聖霊が住んでくださいます。そのときから私たちは新しい人を着て、神の形に似るようにますます新しくされていきます。サウルの場合のように、一瞬にして新しい人に変えられるわけではありません。本当に目立たない、一步一步の積み重ねの中でゆっくりと行われていく変化です。せわしなく生きている私たちには、とてもまどろっこしく思えるような亀のような歩みです。

しかし言われているのです。「あなたは七日間待たなければならない。」主は、このことばに従い続け、十字架の死にまで従って待ち続けました。もしそうであるのなら、私たちも主の歩んだ御跡をたどりながら、やがてすべてが変えられていく日を待つことになるのではないのでしょうか。

「自分は信じて何が変わったのだろうか」と嘆くこともあるかもしれません。しかし、主は私たちのためにご自分のいのちを捨ててくださったのですから、そこまでしてくださった方が、どうして私たちを新しくさせてくださらないことがあるのか。いのちを捨ててまでして、私たちを救ってくださる方なのです。だったら、主と似た者としてくださるはずではありませんか。もしそうでなかったなら、主の十字架の死には何の意味もないことになる。そんなことは絶対にありません。

ですから私たちは、主がご自分のからだ

裂かれ、血が流され、そのようにしていのち
をささげてくださいった恵みを信じて、また一
歩前に踏み出していきたいと願わされます。